関西大学「生徒・進路指導論」　授業資料(2014秋学期)

　私の定時制神戸工業高校時代の教え子である馬場君は、関大の学部生を経て院で学び、今春卒業予定である。春からは、長年の念願を叶えて府立高校の正教諭として新しい一歩を踏み出すが、関大在学中は私の授業で受講生を前に何度か自身の体験発表をしてくれた。中学時代、教師の体罰による不登校ひきこもり、いじめという凄惨な体験を越えて、定時制で自分を取り戻し、関大で専門研究と教職課程の履修に専念し、３教科の免許を取得。教員として自己実現をめざす彼の思いを原文のまま紹介したい。（南）

※この体験発表原稿は、南が担当する関西大学の千里山キャンパスと堺キャンパスの講義で、それぞれ約２００人の学生の前で行ったものである。この後、彼は東京都と大阪府の教員採用試験に合格したが大阪府を選び、2016年大阪府高等学校教諭に採用され、念願の支援学校での勤務を続けている。

私の体験談－教師の体罰からの不登校・ひきこもり、いじめの被虐経験を越えて－

13Ｍ7008 馬場 信宏

はじめに

　本報告は，南悟先生の授業・体験発表を元に、私自身の体験談を書き記したものである。以下、第5節の構成のうち、第1～第3節が中学時代の出来事、第４節が高校時代の出来事、そして第5節は私の教職についての思いである。

1体罰による不登校

　中学１年、13歳の夏、終業式が終わる2週間前の出来事である。私は保体の４限プール授業で学校指定の海パン（水泳着）を忘れた。忘れた懲戒として、保体の教師からプール見学指示・反省書を書かされた。そして授業も終わり、昼食の時間後、5限全体HRの前に、担任(当時26歳・英語教師)より呼び出された。「保体の授業時、お前忘れ物したやろ！今から説教する」。私は忘れた事は悪い事だし、仕方無いと思い指導を受けた。しかし最悪の始まりであった…。

　説教を始めるや否や「お前は保体を受ける資格が無い、お前が不良や！」といきなり怒られた。私は怖くて怯えてすぐ泣き出してしまった。ここまでならまだしも…、「返事が小さい！反省の言葉をハッキリ言え！」。さらには机にある湯呑みをガンガン叩き、破壊した。私は余計に畏怖し、泣くのが止まらない。そして、その担任はヒートアップし、「何で先生がここまで言うとるのか解るか！こら！お前をよく思って言うとるのやぞ！」と今度は教卓の机から立ち上がった。私と同じ目線(私は席から立ちっぱなし)、そしてお腹を二度膝蹴りされた…。私は痛くて泣きながら席についた、「先生、本当にすみません」と大声で謝罪し続けた。

　この一件以来、私は恐怖に怯え、次の日、仮病で欠席した。周囲に何も話せず、親にも話せず、誰にも相談できないまま終業式を終えた。しかし、この体罰が引き金となり、酷い恐怖とPTSDに冒され、夏休み以降は精神状態がおかしくなった。そしてここから丸１年間不登校生活を送ることになる。

2最愛の父親の死

不登校生活から2か月後の13歳の11月、最愛の父親が脳内出血による急病で亡くなった。母親や周囲の身内全員が泣き崩れたし、私は生きる気力を失った。私自身、父親の死以後、周囲に教師の体罰を話した。今まで恐怖に怯え、言えなかったことを何かに吹っ切れたのか洗い浚い話した。なぜ父親が死ぬまで言えなかったのだろうか？今でも解らない。(本当の事実を話すまで，父親と母親とは何度も言い争い喧嘩をした)

　面倒見も良く休日には遊び相手をしてくれる父親を本当に尊敬していた。少々、頑固で融通が利かない、昭和の親父という風格であったが、それを含み大好きであった。その大黒柱を失い、無気力が加速し、毎晩(最低3か月ほど)は、父が寝ていた布団の中で泣いていた。時には自殺も考えた。「もう生きていても仕方ない」とまで…。そしてその傷が癒え始めたのは翌年の9月頃であった。

3 別室登校と陰湿ないじめ

　親の勧めもあり、別室登校という形で学校生活を再開する。午前中～お昼までだけ自習・勉強し、少しずつ生活リズムを取り戻すというものである。私は好きなものを好きなだけ勉強した。まず数学である、私は中学生当時から数学大好きであり、独学で連立方程式も解いていた。自慢ではないが，不登校時でもそれなりに学習能力はあったようである。

　そして中学３年の始め、別室登校の先生が「これなら、B君は数学学力テスト受けてもそこそこできる！正規の学校生活にも戻ってがんばれ！」と。私は学力テストを受験し、75点を残し、上位15％に位置づけた。「高校受験もあるし、正規の学校生活に戻るぞ！」と意気込みをしていた時期でもあった。しかし、これが陰湿ないじめを呼ぶ事になる…。

　「よーB！お前NEET生活しながらでも数学できるんだって！？教えてくれや！デブ」と、「不良」の生徒たち周囲にからかわれた。なぜ試験の出来が解ったのか、それは昼食時、友人らと会話する私の発言からだろうか、噂が広まった。妬みからか、学習用の文房具は盗まれ、「不良」の生徒になすすべが無かった。悔しかった。そして１か月間、不登校に陥る。いじめの事件は解決するも、今度はいじめのPTSDから以後、正規の学校生活に戻ることなく、別室登校で中学生活を終えた。しかし何があっても、それでも数学は好きだった…。

4 夜間定時制

　母親に経済的負担をかけるのは嫌であり、学力劣等からの私立進学は諦め、興味のある情報と数学分野を学べる夜間定時制高校へ進学した。これが私の人生を変える転機となる。

　入学式の雰囲気からも、なぜかこの学校なら続けられそうな気持になった。入学式を終え、担任の教師と三者面談ののち、「不登校(体罰)、父親の死、いじめ」の体験を話した。それらを理解してもらえた上で、「よくがんばってきたんだね」と、これからの授業や生徒指導のありかたを説いてもらえたことが嬉しかった。ストレスが溜まり学校で荒れた時(消火器をばら撒いた)なども、いち早く母親へ連絡が取られ、先生方は、僕の悩みや気持ちを大きな心で受け止めカウンセラー的な役割をしてくれた。

　その夜間定時制の先生方は、一部少数の先生を除き、皆が温かく生徒思いの熱心な先生であり、ほぼ毎日、夜10時まで職員室で補習授業にも携わってくれたほどである。私はその中で、亡くなった父親捜しをしていたのだろうか、と言わんばかりに積極的に先生方に心を打ち明けてきた。中学時代とは真逆である。時には、阪神甲子園球場に野球の観戦に行く先生もいた。いじめのトラウマからか、なかなか友達が出来ない中でも、毎日が充実していた。

　そして、高校を情報科・首席で卒業し、大学へと進学。大学では奨学生制度も利用できた。

5 教師を目指す理由

　定時制高校では、恩師によって楽しく充実した高校生活を送れたこと、また教職課程という存在を大学で専攻できるということを知り、「高校の先生へ恩返しできる」という思いから勉強を重ねてきた。

　はじめは、でもしかのような雰囲気でもあった。しかし。教職課程の勉強は多忙であり、ハードなものであった。友人が脱落する中、「Bちゃん頑張れ！」とエールを貰いつつ、なにくそ精神でかけあがった。先生へ恩返しする！そして、私のような「心の弱い」生徒を助けるんだ！と、毎日が真剣そのものであった。そして３年の時が流れ、信念をもち母校での教育実習を無事に終えた。さらに、大学院で、情報科の教授法を学び研究して指導力も高めたい、と院進学をし、そして真剣に教職者になる決意をする。

おわりに

　今、私は数学・情報の教師を目指して、教職活動中である。母校と府立高校の非常勤講師も務め、大学院で教授法研究といった毎日がハードな日々でもある。しかし、大学進学後もだらけずに信念をもって日々過ごせているのは、私自身を導き育て人間を変えてくれた定時制高校と恩師の存在だろう。どんな時でもカウンセリングマインドの精神で温かく接してくれ、励まし支えてくれたことが大きい。私は常にそれを感謝に、日々生きている。

この秋、私の念願が叶ったが、これからも、この思いを忘れないようにし、いろんな苦しみや悩みを抱えた生徒の支えと味方になれる教師を目指している。